

手塚英孝

光市
(1906～1981)



【著作】

『小林多喜二』（昭和33・筑摩書房）
『落葉をまく庭』（昭和48・東邦出版社）
『手塚英孝著作集』全三巻（昭和57～58・新日本出版社）

光市虹ヶ浜海岸のわかば公園に、手塚英孝の文学碑がある。英孝没後五周年を記念して、昭和六十二年（一九八七）に建立されたもの。総御影石作りの碑の表面に、彼の随筆「二人のお母さん」から一部抜粋した文が刻まれている。

「虹ヶ浜は、十キロほど白浜と松林のつづく瀬戸内のすばらしい海岸だった。少年のころから夏休みになると、握飯の弁当をさげて、泳ぎに通ったなつかしい海だった。」

この場所は生誕地の小周防をくだった河口近くで、虹ヶ浜を見晴らす一番いいところである。「二人のお母さん」とは、宮本顕治の母美代と、小林多喜二の母セキのことである。英孝はこの二人のお母さんからわが子同様の愛情を受けたが、彼の人生は尊敬する宮本顕治・百合子夫妻に対する全面的協力と、小林多喜二の生涯とその業績を集大成する仕事に打ち込んだ一生であった。

多喜二研究者として、研究とともに多喜二全集の編纂、多喜二伝の執筆などをした。寡作ではあったが小説と随筆・評論などにユニークな作品を残している。

特に「父の上京」「風」など代表作七編を収録した作品集『落葉をまく庭』で第五回多喜二・百合子賞を受賞した。

宮本顕治氏は、「私が印象的なのは、彼がその生涯を通じて運動のなかで、運動をささえ、また、亡くなった僚友の家族たちを励まし、獄中にいるものを励まし、助ける、こういうような温かい同志的配慮、気持ち、こういうものがきわめて深かったという点であります」と彼の追悼式で述べている。（『民主文学』手塚英孝追悼特集）

英孝は、ただ作家として書き、研究するだけでなく、日常生活の中で自分たちの運動をささえ、仲間をささえ、拘束或いは亡くなった家庭を訪ねて支援するというような、社会的、人道的配慮において、非常に深いものを持っていた。優しい人であったが、どんなことでも納得しなければ、テコでも動かない頑固一徹な面もあった。

（文・田村悌夫）

【関連情報】

・手塚英孝賞

・多喜二・百合子研究会

民主主義文学・プロレタリア文学に関する秀れた評論に授賞（二年に一回）。

平成12年に日本民主主義文学会が創設。

手塚英孝が亡くなるまで代表をつとめた研究会。現在も研究者らを結集し、公開講座の開催や「会報」を発行している。

連絡先 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-25-6 新日本出版社気付
HP <http://www.shinshon-net.co.jp> ☎03-3423-8402

【閲覧情報】

手塚英孝に関する資料は、財団法人世田谷区美術振興財団世田谷文学館に寄贈されている。

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10 HP <http://www.setabun.or.jp> ☎03-5374-19120（代表）

手塚英孝 年譜

（提供・田村悌夫）



生家（光市小周防）



手塚英孝著作集

明治39（一九〇六）年	一三歳
大正8（一九一九）年	一九歳
大正14（一九二五）年	二一歳
昭和2（一九二七）年	二三歳
昭和4（一九二九）年	二四歳
昭和5（一九三〇）年	二五歳
昭和6（一九三二）年	二六歳
昭和7（一九三三）年	二七歳
昭和8（一九三三）年	二七歳
昭和11（一九三六）年	三〇歳
昭和15（一九四〇）年	三四歳
昭和16（一九四一）年	三五歳
昭和18（一九四三）年	三七歳
昭和20（一九四五）年	三九歳
昭和22（一九四七）年	四一歳
昭和26（一九五〇）年	四五歳
昭和30（一九五五）年	四九歳
昭和33（一九五八）年	五二歳
昭和36（一九六〇）年	五五歳
昭和40（一九六五）年	五九歳
昭和44（一九六九）年	六三歳
昭和47（一九七二）年	六六歳
昭和48（一九七三）年	六七歳
昭和55（一九八〇）年	七四歳
昭和56（一九八一）年	七四歳
《没後》	
昭和57（一九八二）年	
昭和62（一九八七）年	

12月15日、山口県熊毛郡周防村（現・光市）に、医師の父柳助、母寿賀の長男として生まれる。維新の英蘭学者手塚律蔵は曾祖父の弟。

県立徳山中学に入学。19世紀ロシア文学を愛読、特にトルストイの影響を受ける。一年後輩に宮本顕治がいた。

慶應義塾大学入学、社会科学研究会・文学研究会をつくる。学生運動に入り、非法法下の日本共産青年同盟や日本共産党との関係を持つ。

慶応大学高等部を中退。この頃地下印刷所の活動に従事。4月、四・一六事件後一時検束される。

2月、党関係で検挙され、四カ月後に起訴留保になる。10月頃から文化団体の仕事をやるようになり、習作として「風」を執筆、『ナッパ』に投稿。12月、ソビエトから帰国した中條百合子にはじめて会う。

『ナッパ』四月号に「風」を発表。四月、日本共産党に入党。蔵原惟人の指導のもと文化団体の党グループの活動に参加。夏、はじめて小林多喜二に会う。12月、資金関係で検挙されるが、40日後に釈放。

4月、日本プロレタリア文化連盟（略称・コップ）への大弾圧のため、宮本顕治、小林多喜二、今村恒夫、杉本良吉らと非法法生活に入る。

7月頃、宮本顕治が責任者の東京市委員会に移る。9月、検挙される。9月、懲役二年執行猶予五年の判決を受け出獄。明治時代の社会主義文学を研究しつつ、宮本百合子に協力し、獄中の宮本顕治を支える。

8月から、渋沢栄一伝記資料編纂所に昭和18年（一九四三）まで勤務。10月、児玉花外（詩人・大津郡三隅出身）をはじめて病床に訪れる。日本無線株式会社に徴用、敗戦まで工場史資料の調査編纂にあたる。

党本部に勤務し、文化部常駐責任者となる。新日本文学会結成に参加。2月頃、党本部勤務をやめ、『小林多喜二全集』の編纂に専心する。6月、多喜二・百合子研究会を結成。のち同会代表となる。

『新日本文学』12月号に「葉」を発表。この頃結核の加療中であった。2月、『小林多喜二』刊行。

7月、訪中日本作家団（団長江口渙）の一員として、中国を訪れる。8月、日本民主主義文学同盟創立に参加、常任幹事に選ばれる。

3月、『民主文学』編集長になる。12月、『定本小林多喜二全集』完結。『文化評論』4月号に「落葉をまく庭」を発表。

2月、作品集『落葉をまく庭』で第五回多喜二・百合子賞を受賞。復刻全集『小林多喜二文学館』（ほるぷ出版4月刊）の「解題」を執筆。12月1日、午前10時15分がん性胸膜炎のため死去。

12月1日、没後一周年に『手塚英孝著作集』が出版される。12月6日、没後五周年を記念し、光市わかば公園に文学碑建立される。